

論文

絵本 11 ぴきのねこ シリーズの受容
—— 児童劇の脚本を中心に ——

服 部 裕 子

日本福祉大学 子ども発達学部

On the Acceptance of Picture Book "Eleven Hungry Cats" Series
With a Focus on Scripts for Children

Yuko HATTORI

Faculty of Child Development, Nihon Fukushi University

Keywords: 馬場のぼる, 絵本『11 ぴきのねこ』, 児童劇の脚本, 「青島広志のショート・ショート ミュージカル 11 ぴきのネコ」

要旨

漫画家馬場のぼるの代表作『11 ぴきのねこ』は、2017 年で誕生 50 周年を迎える大人気ロングセラー絵本である。この人気を背景に、絵本は脚色され、幼稚園・保育園、小学校の生活発表会の演目の一つになっている。そこで本稿では、子どもが演じる脚本を中心に、11 ぴきのねこ シリーズの受容の一端を明示することにした。まず、受容状況を概観し、11 ぴきのねこ が幅広い年齢層に支持され、以前にもまして子どもにとって身近な存在になっていることを示した。次に原作絵本『11 ぴきのねこ』を分析し、この絵本にはもともと劇化しやすい要素がいくつも含まれていることを明らかにした。さらに、児童劇の 2 つ脚本、井上ひさし作・青島広志曲「青島広志のショート・ショート ミュージカル 11 ぴきのネコ」と、田中喬子脚色 & 作詞・井戸和秀作曲「11 ぴきのねこ」を分析し、音楽的な要素を重視している点、原作に漂うユーモアが軽減された点など、両作には共通点が多く見られるが、結末における脚色については、大きな違いがあることを指摘した。実際に上演する際には、まず原作の読みを深めることが重要だが、これらの脚本を参考にする場合には、原作との相違を考慮したうえで劇作りをすることが望まれる。

はじめに

絵本『11 ぴきのねこ』は、第 15 回産経児童出版文化賞を受賞した傑作であり、漫画家馬場のぼるの代表作である。この絵本は 1967 年 4 月に刊行され、今年 2017 年で誕生 50 周年を迎える。出版元こぐま社では、これを記念し読者プレゼントとして、シールと葉書付き絵本の販売や抽選によるグッズの進呈を企画し、オールカラー

本『馬場のぼる ねこと漫画と故郷と』（こぐま社 2017.8）を刊行した。11 ぴきのねこ シリーズは、次作『11 ぴきのねことあほうどり』（1972.11）、『11 ぴきのねことぶた』（1976.12）、『11 ぴきのねこ ふくろのなか』（1982.12）、『11 ぴきのねことへんなねこ』（1989.12）、『11 ぴきのねこ どろんこ』（1996.10）と続き、文字のない『絵巻えほん 11 ぴきのねこ マラソン大

会』(1984.12, 改訂新版 1992.7) を合わせると全7作, 第1作目から29年にもわたって刊行されたことになる。シリーズ全体の総発行部数は, やや古い数字ではあるが, 2009年の時点で3,880,600部にも及ぶ¹。

最近の発行状況は, 部数の多い順に第1作『11ぴきのねこ』が2017年5月に186刷, 次作『11ぴきのねことあほうどり』(2017年1月) が141刷, 『11ぴきのねこ ふくろのなか』(2017年1月) が100刷, 他3作いずれも2017年に増刷されている。11ぴきのねこシリーズは, 現時点においても人気が衰えることはない。まさに大人気ロングセラー絵本なのである。受賞歴も産経児童出版文化賞だけでなく, 第2作目『11ぴきのねことあほうどり』も, 4コマ漫画『バクさん』と合わせて第19回文藝春秋漫画賞(1973年)を受賞, 『絵巻えほん 11ぴきのねこ マラソン大会』も, イタリアのボローニャ国際児童図書展エルバ賞(1985年)を受賞しており, 国内外から高く評価されている。現在までに, シリーズが全訳された中国語版『11只猫』をはじめ, 英語, フランス語, スウェーデン語など数ヶ国語に翻訳されている。

こうした絵本の人気を背景に, You Tube には, 子どもが演じた 11ぴきのねこ シリーズの劇がいくつも投稿されている。絵本が脚色され, 幼稚園・保育園, 小学校の生活発表会, 少年少女合唱団のコンサートの演目の一つになっているのである。そこで本稿では, 子どもが演じる脚本を中心に, 11ぴきのねこ シリーズの受容の一端を明らかにしたい。具体的な方法として, シリーズの中でも圧倒的な人気を誇る第1作目『11ぴきのねこ』に焦点を当て, 登場人物とストーリーに着目し絵本がどのように脚色されているのか, 現在入手できる2つの脚本を取り上げ分析する。そして最後に子ども自身が「11ぴきのねこ」を演じる際の留意点についても言及する。

なお, 11ぴきのねこ シリーズの児童劇および劇遊びに関する先行文献については, 調査した限り, 本吉圓子「子供に聞かせたいお話とその発展 11ぴきのねこ」², 住田勝「文学の読みの学習指導の研究 11ぴきのねこ ごっこ遊びの分析を通して」³, 坂本麻実子「『11ぴきのネコ』劇中歌と原典の関係 選曲の問題を考えるために」⁴, 徳永満理「子どもが発見する演じあそびの楽しさをもたらせる劇あそび」(『11ぴきのねことぶた』の実践報告)⁵のほかは見当たらなかった。絵本研究に比べて, 文献が少ないのが現状である。

第1節 絵本 11ぴきのねこ シリーズの受容状況

児童劇の脚本を分析する前に, まず絵本 11ぴきのねこ シリーズが, 現在子どもを取り巻く環境の中に, どの程度溶け込んでいるのかについて概観する。

今年2017年には, 絵本『11ぴきのねこ』生誕50周年を記念して, 作者の出身地青森県三戸町では「馬場のぼる ねこの世界展」(2017.4.29~8.20)が開催された。「馬場のぼる略年譜」⁶によれば, こうした展覧会は, 馬場のぼるが他界した翌年2002年にも開催されたが, 2009年の「『11ぴきのねこ』がやって来る ニャゴ! ニャゴ! ニャゴ! 馬場のぼる展」(青森県立美術館 7.29~9.6)以降は毎年のように企画され, 現在「11ぴきのねこと馬場のぼるの世界展」は恒例の行事に位置づけられている。このように 11ぴきのねこ シリーズに対する関心は, 依然として高いことがわかる。

また, キャラクター 11ぴきのねこ は原画がデザイン的な絵であるので, グッズを作製しやすく, その種類も多い。作者自身が製作した「11ぴきのねこ かるた」, ポストカードブック以外にも, めいぐるみ, パペット人形, カレンダー, 文房具, タオル, 布地, エプロン, ポーチ, 手提げ袋, Tシャツ, ワンピース, 陶器皿やコップなど多岐にわたり, 通販で気軽に購入することができる。もちろん50周年記念グッズも発売された。さらに, 出身地三戸町を中心に地域おこしと結びついて郵便切手や葉書まで販売されている。「11ぴきのねこ 年賀状セット」(2014~), 「11ぴきのねこ かもめーる」(2016~), オリジナルフレーム切手として「馬場のぼるの 11ぴきのねこと仲間たち」(2010~)や「絵巻えほん 11ぴきのねこ マラソン大会」(2010~)などがあり, 完売品が多い。

そのほか三戸町では, 11ぴきのねこバス, 「ミヤンのへ郵便局」の局長とらねこ大将, 11ぴきのねこの郵便スタンプなど, 11ぴきのねこ シリーズの故郷として宣伝するようになった。

次に, 他のメディアで表現された主要なものを挙げてみよう。やはり絵本の人気と重なり, 発行部数が最多の『11ぴきのねこ』と, 次いで多い『11ぴきのねことあほうどり』が, 他のメディアでも注目されている。

まず, 絵本『11ぴきのねこ』が刊行された2年後の

1969 年には、NHK の幼児向け番組で井上ひさしが脚色した連続人形劇が放映されている。当時井上は、同じ NHK で人形劇「ひょっこりひょうたん島」(1964.4～1969.4)の脚本を手がけていたからである。その後井上は、出演者の一人で劇団テアトル・エコーの熊倉一雄から舞台化の依頼を受け、戯曲「十一ぴきのネコ 子どもとその付添いのためのミュージカル」(以後副題省略)⁷を書き上げた⁸。井上のミュージカル「十一ぴきのネコ」は、音楽を「ひょっこりひょうたん島」でコンビを組んだ宇野誠一郎が担当し、1971 年 4 月にテアトル・エコーによって初演された。その後井上は、1989 年 9 月のこまつ座公演で大幅に改稿し『決定版 十一ぴきのネコ』⁹を発表した。この井上ひさしの戯曲「十一ぴきのネコ」については後に触れるが、日本児童青少年演劇協会の第 6 回斎田喬戯曲賞を受賞(1971)するなど、決定版を含めてプロやアマチュアの劇団、大学や高校演劇部によって、5000 回以上も公演され¹⁰、知名度の高い作品になっている。

人形劇の上演では、古くは人形劇団ブークによる「11 ぴきのねこ」(川尻泰司脚色 1978)が子ども劇場などを巡回していた。近年では人形劇団クラルテが「11 ぴきのねこ ふくろのなか」(2004)を皮切りに 2017 年までシリーズ作品を 1 作ずつ約 3 年おきに計 5 作発表している¹¹。人形劇団ブーク、人形劇団クラルテ、どちらの劇団も日本有数の人形劇団である。また平多正於舞踊研究所によるモダンダンス「11 ぴきのねこ + アニメム」(1983)が昭和 59 年度児童福祉文化賞(1984)を受賞している。

さらに劇場版アニメーションや紙芝居も製作されている。アニメーション「11 ぴきのねこ」と「11 ぴきのねことあほうどり」は両作とも、テレビアニメ「まんが日本昔ばなし」(TBS 系)のスタッフ、グループ・タックが製作し、ヘラルド・エンタープライズが配給した。劇場公開はそれぞれ 1980 年 7 月、1986 年 8 月。上演時間は 83 分、90 分である。アニメ「11 ぴきのねこ」のビデオは現在在庫がない状態だが、ネット上では視聴できる。紙芝居は両作とも、作者自身の手によって製作され、NHK サービスセンターから 1987 年に販売されている。

以上述べてきたように、近年の空前の猫ブームの影響もあると思われるが、11 ぴきのねこ シリーズは、もはや子どもだけでなく、幅広い年齢層に支持され、知名度の高いキャラクターの一つとして存在している。子ど

もは、絵本の世界だけでなく、パペット人形やぬいぐるみで遊ぶこともできるのである。

第 2 節 原作『11 ぴきのねこ』の作品世界

本節では、児童劇の脚本を念頭に置きながら、登場人物・ストーリーに着目し、絵本『11 ぴきのねこ』の魅力と劇化しやすい点について述べたい。

【登場人物】

主人公は藤色という奇抜な色をした 11 匹のねこである¹²。作者が「11 ぴき」という強い破裂音を好み、大將と 10 把ひとからげの兵隊という主人公を思いついたというが¹³、虎縞の「とらねこたいしょう」以外、10 匹のねこには名前がなく個別に見分けることはできない。「この 集団 であるという特性こそが『11 ぴきのねこ』の物語の展開、絵の描写やキャラクターにおいても重要な役割を果たしている」という指摘があるように¹⁴、主人公がねこ軍団という設定に独自性がある。

「しょくん」と呼びかける「とらねこたいしょう」率いるねこ軍団は全員が野良猫で、いつも腹ぺこである。それにもかかわらず、猫特有の自由で気ままな部分が生かされ、作中には野良猫ゆえの薄汚れた感じも悲壮感も見られない。どんなときでも、彼らはエネルギーにあふれているのである。小さい魚を 11 等分する場面でも、ほほえましいほどである。ねこの表情は基本的には目がへの字の笑顔、大らかで、どこかユーモアに満ちている。それは、作品全体が丸みのある漫画特有の輪郭線と、藤色・ピンク・黄色・青・緑などの暖かみのある色調で描かれているからであろう。「おおきなさかな」との格闘場面さえ、明るく楽しい雰囲気は損なわれてはいないのである。一方の標的となる「おおきなさかな」にしても、「ねんねこさっしやれ」¹⁵を愛唱するような心穏やかな怪物である。この点にも意外性があり、面白さを増す効果がある。

【ストーリー】

作者馬場のぼるは、「宝島」と「白鯨」と「老人と海」をつないだようなストーリーになってしまったと語っているが¹⁶、この絵本は、主人公 11 ぴきのねこが、巨大な魚を捕るために未知の旅に出かけ、最初は強大な力を持った魚に圧倒されながらも諦めず、協力し知恵を働かせ、ついに捕獲に成功するという物語である。しかし、

いわゆる典型的な勇士談からはかけ離れており、勝利者の11ぴきのねこは、勇気、意志の強さ、団結力、知恵を持ち合わせているものの、優等生として描かれているわけではない。「してはいけないことをする」主人公に、子どもは惹かれるのである。そもそも出発の動機は空腹を満たしたいという自己の欲求である。捕獲の方法は、子守歌を歌って眠らせるというだまし討ちであり、みんなに見せるまで絶対に食べないという約束は容易に破られてしまう。夜が明けると魚は骨だけ、11ぴきのねこは「たぬきのおなか」になるという最後の2場面は実に衝撃的な結末を表している。このような読者の固定観念を打破した面白さが笑いを誘い、この作品の最大の魅力となっている。

一方、作者によれば、この作品でとくに強調したかったのは、悪党でもないのに餌食となってしまう「おおきなさかな」の運命であるという¹⁷。たしかに「おおきなさかな」の視点に立てば、この上もなく悲惨な最期を遂げた残酷話として読むこともできる。ここに漫画家特有の風刺が生かされており、絵本『11ぴきのねこ』は単なる勧善懲悪の話にも、「パラ色に満ちたお話」にもなっていないのである。作者馬場は、「子どもたちが読む本はできるだけたくしく、おもしろくシンプルにあればいいと。その中に、隠し味のようにして織り込まれた、作者からのメッセージを受けとめてもらえればうれしいと」語っているが¹⁸、この絵本には、こうした創作態度が存分に反映されているといえる。

【劇化しやすい点】

まず、ストーリーが魚を捕りに出かけて帰るという、幼年向け童話に多い「行きて帰りし物語」の形式で構成されている。物語が横道に逸れることはなく、単純明快に進むため、幼児にさえ理解しやすい筋立てである。テーマも子どもに関心の高い「食べること」であり、腹ペこだから満腹になるまで食べたいという出発の動機は、子どもにも明確に伝わる。「じいさんねこ」の話を信用して巨大な魚を捕りに未知の旅に出かけるという点では冒険の要素もあり、成功物語なので達成感も得られやすい。住田勝は前述の論文で、知恵を出しながら強大な敵に立ち向かう構造は、冒険ごっことして「ごっこ遊び」を仕組もうとする際の有効な筋立てとなると述べている¹⁹。

約束を破って盗み食いをするという本音を優先した劇的な結末は、子どもの論理と一致し、笑いとともに、子

どもがもっとも共感し好む場面であろう。11ぴきのねこの満足感を表した、結末の「たぬきのおなか」という満腹の表現も実に的確で、子どもの印象に残りやすい。本吉圓子は、昼食後の「タヌキのおなかになっちゃったね!」という教師の言葉がクラスの子どもに浸透したので、それを契機に「11ぴきのねこ」の劇発表を提案したと報告している²⁰。

このように、この絵本の場合には、読み聞かせた後に、「11ぴきのねこ」の「ごっこ遊び」へ、さらに劇発表へと発展させることは比較的容易であろう。子どもの年齢や興味に合わせて、たとえば、絵本の各場面「魚を見つける旅に出る場面、魚と格闘する場面、魚を食べる場面等」、ここから一場面だけを取り出して「ごっこ遊び」で楽しむこともできる。各場面をつなげても、一部を省略しても、一つの劇として仕上げることもできるのである。

また、物語の重要な場面で「ねんねこさっしゅれ」が歌われている。作中に歌詞は記載されていないが、「たいうぶし」と合わせて、歌が2曲挿入されているので、ミュージカル仕立てにもしやすいといえる。

登場人物も魅力的で、ストーリー同様に脚色しやすい。野性的でたくましく生きる主人公ねこ軍団は、エネルギーに満ちた子どもの本性と重なるため、表現したいという子どもの意欲は高いと思われる。作中で11ぴきのねこは「元気な少年団といった趣き」を持ち、一致団結して行動するが、役割分担する場面もあり、表情や動作が一樣に描かれているわけではない。したがって、どのような個性のねこでも登場させることができるので、どのような性格の子どもでも参加しやすいといえるのではない。ねこの台詞も、みな同じ言葉の繰り返しでもよく、個別に少しずつ変えても成り立つ。低年齢の場合には、猫に扮して演じるだけでも楽しいだろう。

田川浩三は『劇づくりで育つ子どもたち』の中で、劇にしやすい絵本について以下のように語っている。起承転結のはっきりした作品、子どもや親に感動をよびそうなもの、主人公の貫通行動（一本線で前に進む）がよくわかり、ハッピーエンドなものがいい²¹。まさに、この『11ぴきのねこ』はそれに該当する作品なのである。作者馬場のぼるは、絵本創作の一方で、生涯漫画を書き続けた。漫画家が重視したユーモアと風刺と「オチ」が、この絵本を際立たせている。

第3節 児童劇の脚本

本節では、絵本『11匹きのねこ』がどのように脚色されているのか、市販されている子どもが演じるための脚本を2つ取り上げ具体的に分析していく。

なお、絵本『11匹きのねこ』以外の脚本について付記すると、わたなべめぐみ『11匹きのねことあほうどり』（わたなべめぐみ『絵本であそぼう』国土社1999.7）、秋田桂子『11匹きのねことあほうどり』（秋田桂子作・中地雅之音楽『3・4・5歳児の劇遊び脚本&CD』ひかりのくに2009.9）、二本松はじめ『絵本『11匹きのねこふくろのなか』であそぼう』（二本松はじめ『ピカリン ベストつながりあそび・うた3』音楽センター2006.6）などが入手できる。ただし、『絵本『11匹きのねこふくろのなか』であそぼう』には台詞の記載がなく、いわゆる演劇の脚本ではないが、場面ごとに曲に合わせた遊びが提示されているので、各場面をつないで一つの劇にすることも可能である。

(1) 井上ひさし作・青島広志曲「青島広志のショート・ショート ミュージカル 11匹きのネコ」

【井上ひさしの戯曲「十一匹きのネコ」との関係】

小学校の生活発表会や少年少女合唱団の公演では、井上ひさし詞・青島広志曲『11匹きのネコ 合唱版』（音楽之友社1985.8）の掲載曲が利用されることが多い。本の奥付を見ると、2016年11月で45刷も発行されており、定着していることがわかる。この『11匹きのネコ 合唱版』は、前述した井上ひさしの戯曲「十一匹きのネコ」の劇中歌を原詩とし、青島広志が新しく曲を付けた合唱曲集である。青島広志は合唱曲・歌曲・管弦楽曲等を作曲する著名な音楽家であるが、井上ひさしのミュージカル公演本来の作曲者ではない。本来の作曲者は宇野誠一郎である。ここで青島の合唱曲集刊行までの経緯について簡単に説明すると、劇中歌の楽譜が市販されていない状況で、井上の歌詞に青島が作曲したものを雑誌『教育音楽 小学版』に連載したところ反響が大きかったため、それを単行本として刊行することになったという²²。青島はこの合唱曲集刊行後、さらに「青島広志のショート・ショート ミュージカル 11匹きのネコ」（ビクターエンタテインメント2007.2）という題で「台本・楽譜集」と 指導編、上演編、カラピア

ノ で構成されたDVDをセット販売した²³。今度は青島がビデオ制作のために台本を書き下ろしたのである。これを本稿では青島広志の「11匹きのネコ」と呼ぶことにする。この青島の「11匹きのネコ」は、小学校中高学年程度でも演じられる、いわば井上ひさしの「十一匹きのネコ」のジュニア版と位置づけられる。青島の「11匹きのネコ」を分析する前に、まず井上ひさしの戯曲について簡単に述べておく。

【井上ひさしの戯曲「十一匹きのネコ」】

井上ひさしの「十一匹きのネコ」は、絵本が脚色され2時間にも及ぶミュージカルとして舞台上演された。それ以前に放映されたテレビ番組の人形劇に関しては詳細が不明であるが、創作当初から、絵本の「とらねこたいしょう」に該当する主人公の「にゃん太郎」だけでなく、ねこ集団にはすべて、軽い悪役の「にゃん十一」をはじめ、「にゃん次」から「にゃん十」まで名前が付けられていたようである²⁴。舞台化にあたって作者自身が「ネコの集団を書き分けることに重点をおいた」と語るように²⁵、猫糞、穏健温和仏 旅廻り、徴兵のがれ、軍隊嫌いなど、ネコたちの個性を強調し、元飼主がシェイクスピア学者、中村貧弱一座、ベトナム戦争帰りのGI傷病兵、こそ泥等だったという、それぞれの過去を語る場面まで挿入している。またネコたちは人間のゴミ捨て場で暮らす薄汚れた野良猫という設定である。

ストーリーも、登場人物と同様に変更されている。魚が骨だけになったという絵本の結末に続いて、野良ネコ天国の建設を夢みる場面と、さらにその10年以上後のネコたちの状況が「エピローグ・報告」として追加されている。その「エピローグ・報告」は、初代大統領から失脚した「にゃん太郎」が、ネコ国繁栄の裏側には暗い影があると述懐する最中に、「9つの影」によって撲殺されて終わるのである。屍体が横たわる幕切れは、絵本世界の愛らしい雰囲気とは無縁である。この戯曲に井上ひさしは、創作時期、70年日米安保条約締結前後の日本の風俗を色濃く反映させている。大きな魚を捕ったねこの物語と高度経済成長を遂げた日本を重ね合わせ、作中に痛烈な批判を込めたのである。

ところで井上の初期の戯曲は、ことば遊びにあふれていると評されるように、この「十一匹きのネコ」には、身体の動きを誘発する言葉が満ちあふれている²⁶。劇中歌の「のんだくったマーチ」と「十一匹のネコが旅に出

た」の一部を抜粋してみよう²⁷。

「のんだくったマーチ」

サンマもマンマも

もうタンマ！

キンツバキンピラ

マッピラだ！

サキイカノシイカ

ノシちまえ！

トンカツキントン

トンといや！

「十一匹のネコが旅に出た」

みんなネコネコ

鼻を ヒコヒコ

ハラはペコペコ

だけどニコニコ

山を ノコノコ

丘を トコトコ

尻尾 ピコピコ

湖 ドコドコ

まさに、語呂合わせや駄洒落に富んだ、子どもが喜んで歌いそうな歌詞である。「コトバの意味よりも音の遊びを重視してみよう」²⁸という作者の意図が明確に表され、作中に独特の面白さが漂っている点も忘れてはならない。

【井上ひさし作・青島広志曲「青島広志のショート・ショート ミュージカル 11匹きのネコ」】

井上ひさしの社会性が強く表された部分を削除して、子どもにも理解しやすい1幕物のミュージカルにしたのが、青島の「11匹きのネコ」である。DVDビデオには、青島自身が実際にむさし野ジュニア合唱団「風」所属の子どもたちを指導した風景やミュージカル公演等が撮影されている。実際に上演を企画する場合には、かなり役立つ便利な音楽用教材である。それによると、単行本『11匹きのネコ 合唱版』とは異なり、劇中歌が17曲から13曲に減らされている。劇中歌については、すでに坂本麻実子が前掲論文「『11匹きのネコ』劇中歌と原典の関係」の中で、それぞれを細かく比較分析しているので、ここでは詳しく述べないが、数曲の劇中歌と大半

の台詞が削除されたことで、井上ひさしの独自色は薄められた。

青島のミュージカルでは台詞は重要ではない。物語は大部分を占める劇中歌を中心に進んでいく。「上演ノート」によると、「物語の概略」を参考に作った台詞を劇中歌と劇中歌の間に入れてつなげばよいと記されている。「台本・楽譜集」の「曲中の演出ポイント」には、曲ごとに振付け・移動などが細かく指示されており、歌とそれに伴う身体表現を重視していることがわかる。ある程度の歌唱力が前提条件となるが、井上ひさしの歌詞を生かした、心に響く魅力的な合唱曲が多く含まれている。

登場人物について述べると、井上の戯曲とは異なり、主人公「にゃん太郎」をはじめ、ネコたちが明確に個別化されているわけではない。青島の説明によると、11匹きのネコと老人（にゃん作老人）最低12人いた方がよいが、50人でも100人でも可能という設定である。台詞は「みんな」と通し番号の「ソロ」に区別されているだけであり、劇中歌のソロの部分も任意である。大勢に振り分け、できるだけ多くの人に演じる楽しさを知ってもらうことを意図しているからである。都会に住む野良猫をイメージして、意図的に顔を汚すメイク、ホームレスを連想させる衣装が提案されている。主人公は腹ペコだが、エネルギーであるというイメージを残しながらも、明るい暖かみのある色調の絵本世界とは異なる印象を受ける。

ストーリーについては、青島自身が動画の中で、都会のごみごみとした裏町に暮らすネコたちが、何とかそこを抜け出してネコの天国を作るという物語であると説明している。井上戯曲から「エピローグ・報告」の場面が削除されたものの、それ以外は筋で変わりはない。約束を破って盗み食いし魚の骨だけが残るという結末ではなく、魚で満腹になったネコたちが湖に住みつくことを決め、「ノラネコ天国ソング」を歌って終幕するのである。11匹きのネコたちが自らの努力で成功を収めるハッピーエンドの話に変わりはないが、このような幕切れは、絵本に見られる奇想天外な面白さを半減させたように思われる。しかし、青島の「11匹きのネコ」が、絵本とは別の味わいを持った本格的なミュージカルを目指した脚本であることは言うまでもない。

(2) 田中喬子脚色&作詞・井戸和秀作曲「11匹きのねこ」

田中喬子脚色の「11匹きのねこ」は、井戸和秀他

『たのしいオペレッタ集3』（音楽之友社 1998.12）に所収された、幼児・小学校低学年向けの作品である。

劇中歌は、原作に掲載されている2曲、子守歌「ねんねこさっしやりませ」（「ねんねこさっしやれ」に該当）と、「さかながとれた」（「たいりょうぶし」に該当）を含む全5曲に絞られている。いずれの歌も、子どもに負担がかからないように、歌詞も短いごく簡単な歌ばかりである。B.G.Mは「ピーターと狼」（プロコフィエフ作曲）などのクラシックを採用し、名曲鑑賞も意図している。ナレーションが状況を説明し、場面をつなぐ重要な役割を果たしている。

主人公は、町はずれのゴミ捨て場に暮らす11ぴきのねこという設定であり、「とらねこたいしょう」というリーダーは存在しない。ただし外見はみな一様ではなく、三毛猫、黒猫など多種類のねこがよいと指示されている。

ストーリーは絵本と大筋で同じであるが、全体に簡略化されている。小さな魚を11等分に分ける場面、「おおきなさかな」が歌う場面、食べないと約束する場面などが省略されたため、原作に漂うユーモアが軽減されたように思われる。魚と一度も対決せず逃げ回るという変更にも違和感がある。また、原作の台詞は、「おじいさんねこ」の台詞に反映されている程度であり、大半の台詞は独自に創作されている。集団行動を表現するためだと思われるが、前の台詞に呼応して繰り返すようなねこ全員の台詞が目立っている。

この脚本の最大の特徴は、結末における意外性を強調するために、あえて2幕物の構成にしたことである。魚を捕獲した後、観客の目を一旦舞台から遮断する必要があると考え、結末だけを残して第1幕を閉じ、第2幕は、骨だけの魚とたぬき腹の寝ているねこたちの場面から始まり、ナレーションによる状況説明の後すぐに幕が下りる。こうして原作に見られる結末の面白さを舞台で表現しようとしたのである。青島の「11ぴきのネコ」とは対照的な演出である。自主的に劇を作る際の参考資料となるだろう。

以上のように、井上ひさしの脚色を含めて3つの脚本を取り上げ、登場人物とストーリーを中心に、それぞれの特徴について述べてきた。子ども向けの2作には共通点が多く見られた。主人公が都会の裏町（町はずれのゴミ捨て場）に住む野良猫と限定された、リーダー格の「とらねこたいしょう」が明確に位置づけられていない、「しょくん」など原作の台詞を生かそうとする意図が感

じられない、音楽的な要素を重視している、原作のユーモアが軽減されたなどである。しかし、結末における脚色については、両者に大きな違いがあることが明らかになった。

おわりに

11ぴきのねこ シリーズは、前述したように、絵本の刊行だけにとどまらず、近年では毎年原画展が開催され、多種類のキャラクターグッズが販売され、演劇やアニメなど他のメディアでも表現されている。親子2代にわたって50年間愛され続け、以前にもまして、子どもにとって身近な存在になっているように思われる。子どもと11ぴきのねことの関係は、絵本以外からでも深められるかもしれない。

キャラクターデザインは漫画家が描いた絵であり、グッズとなっても絵本世界との違和感が大きくはない。メディアミックスの現代において、11ぴきのねこは、まさに時代に合った絵本の主人公であるといえるだろう。

そもそも、この絵本は、作者が漫画家出身であるため、編集者佐藤英和がいう「絵でお話を語る」ように作られている²⁹。全体に文が短く、さらにページとページの間に大きな飛躍がある箇所まである。つまり、それは原作の絵本に、読者が絵を見て、さまざまに想像をふくらませる余地が十分にあるということである。絵本『11ぴきのねこ』では、骨組みを残したまま、創意工夫を凝らした脚本を作り出すことが可能なのである。

近年、幼稚園・保育園、小学校の発表会においては、歌が振付きで挿入される劇が好まれている。音楽的な要素を加えることで、大人数が参加でき華やかな舞台を演出できるからであろう。「11ぴきのねこ」の場合には、もともと物語の中に「ねんねこさっしやれ」と「たいりょうぶし」が挿入されているので、ミュージカル仕立てにしやすいという利点がある。前掲の田中喬子の脚本等を参考にしたり替え歌を創作したりして演じることは難しいことではない。もし、本格的な歌を入れたミュージカルを志向するのであれば、やはり青島広志の合唱曲を参考に組み立てるのがよいだろう。

しかし前述したように、原作の絵本との相違は大きい。その点を認識し舞台でどう表現するのか、登場人物を都会に住む薄汚れた野良猫にするのか、結末をノラネコの国建設で終わらせるのか、それとともできるだけ原作に近づけるのかなど、一度検討してみることが肝要ではない

だろうか。また、一人に注目が集まる配役を嫌う傾向があるが、リーダー格の「とらねこたいしょう」を設定するのか否かも問う必要がある。もちろん、子どもの歌唱力に応じて選曲にも配慮しなければならない。見栄えがよいからと、ただCDの曲を流して、それに振り付けをするだけの劇は避けたいところである。坂本麻実子の提案のように、小学校低中学年の場合には思い切って曲数を4曲程度に減らすのも一案であろう³⁰。

この劇の最大の見せ場は、やはり結末の意外性にあると思われる。田中喬子の脚本のように、あえて2幕物の設定にしてもよいだろう。舞台装置については、「おおきなさかな」をどのように舞台上で表現するのが鍵となる。人間が入れる程度の鯉のぼりのような形にする、裏返すと骨だけの絵が描かれた段ボール製の大型魚を作るなど、製作者の技量と空間の大きさに対応した工夫が求められる。

幼稚園・保育園、小学校低学年の場合には、絵本の読み聞かせから劇遊びや劇発表へと発展させるのが自然の流れである。劇に入る準備段階として、子どもとともに絵本の読みを深めることは何よりも重要である。まずはそれを手がかりに、子どもの歌唱力にも配慮しながら自分たちで創作していくことが望まれる。劇遊び・劇発表の際、自己主張できない遠慮がちな子どもには、パペット人形を使って演じる方法も、自己表現を促すための効果的な手段になりうるだろう。人形の方が感情移入しやすいため、臆することなく演じられるからである。

いずれにしても、絵本『11ぴきのねこ』は、ごっこ遊びも大人の鑑賞にも堪える本格的なミュージカルも創出する構造の稀な作品であるといえよう。漫画家特有のユーモア漂う世界を、どのように舞台上で表現するのか、独創的な脚色が望まれる。

*なお表記については原文を尊重し、原作の絵本では「ねこ」、井上ひさし、青島広志のミュージカルでは「ネコ」を使用した。

注

1. 2009年時点の総発行部数の内訳が「『11ぴきのねこ』がやって来る ニャゴ! ニャゴ! ニャゴ! 馬場のぼる展」図録(2009 p.11)に記載されている。それによると、『11ぴきのねこ』(4月)156刷, 1,329,100部。『11ぴきのねことあほうどり』(6月)117刷, 872,500部。第3作『11ぴきのねことぶた』(4月)80刷, 511,500部。第4作『11ぴきのねこ

- ふくろのなか』(5月)78刷, 514,000部。『絵巻えほん 11ぴきのねこ マラソン大会』改訂新版と合算(4月)33刷, 114,000部。第5作『11ぴきのねことへんなねこ』(8月)51刷, 302,500部。第6作『11ぴきのねこ だろんこ』(4月)39刷, 237,000部。
2. 本吉圓子「子供に聞かせたいお話とその発展 11ぴきのねこ」『幼児と保育』7月増刊号 1981.7
3. 住田勝「文学の読みの学習指導の研究 11ぴきのねこ ごっこ遊びの分析を通して」『国語と教育』第30号 2005.3
4. 坂本麻実子「『11ぴきのネコ』劇中歌と原典の関係 選曲の問題を考えるために」『富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究』第7号 2013.1
5. 徳永満理「子どもが発見する演じあそびの楽しさをもたせる劇あそび」徳永満理他編『子どもが発見する ごっこ・劇あそび・劇づくり』かもがわ出版 2016.6 『11ぴきのねことぶた』の実践例が紹介されている。
6. 『馬場のぼる ねこと漫画と故郷と』こぐま社 2017.8 所収
7. 井上ひさし「十一ぴきのネコ 子どもとその付添いのためのミュージカル」『道元の冒険』新潮社 1971.8 所収(『悲劇喜劇』1971.2 初出)
8. 井上ひさし「決定版までの二十年」『決定版 十一ぴきのネコ』新潮社 1990.4 pp.193 - 194
9. 井上ひさし『決定版 十一ぴきのネコ』新潮社 1990.4 (こまつ座の季刊誌『the 座』第14号 1989.9 初出)
10. 井上ひさし「決定版までの二十年」p.195
11. 人形劇団クラルテ「11ぴきのねこふくろのなか」(2004), 「11ぴきのねことぶた」(2007), 「11ぴきのねことあほうどり」(2010), 「11ぴきのねこだろんこ」(2013), 「11ぴきのねことへんなねこ」(2017)
12. ねこの身体の色や体型は刊行時期によって異なる。第1作目『11ぴきのねこ』の場合、初版の身体の色は灰色であるが、第2作目『11ぴきのねことあほうどり』が刊行された頃より現在の藤色に変わったようである。さらに第3作目の『11ぴきのねことぶた』以降は藤色から水色に変更されている。現在販売されているキャラクターグッズは身体が水色のものが多い。
13. 馬場のぼる『ねこのせかい』こぐま社 1986.9 p.40
14. 中川亜沙美他「『11ぴきのねこ』論 キャラクターの分析を中心に」『絵本学会研究紀要』第14号 2012.3 p.59
15. 作中の「ねんねこさっしやれ」は、中国地方の子守歌「ねんねこさっしやりませ」(山田耕作編曲)を連想させる。1番の歌詞「ねんねこさっしやりませ 寝た子のかわいさ おきて泣く子の ねんころろ 面にくさ ねんころろん ねんころろん」
16. 馬場のぼる「11ぴきのねこについて」『月刊絵本』1973.10 p.50
17. 同上書 pp.50 - 51
18. 「インタビュー：漫画家・馬場のぼるさん」『月刊音楽広場』第28号 1989.3 p.11
19. 住田勝 前掲論文 pp.5 - 6
20. 本吉圓子 前掲論文 p.100

21. 田川浩三他編『劇づくりで育つ子どもたち』かもがわ出版
2010.4 pp.158 - 159
22. 『11ぴきのネコ 合唱版』発行の経緯について青島は、『11
ぴきのネコ 合唱版』の冒頭で、高校2年生の1971年に
演劇部のミュージカル公演のために、井上の戯曲「十一ぴき
のネコ」の作曲を依頼されたことが発端となり、後にそれを
雑誌『教育音楽 小学版』に小学生向けの教材として連載し
たところ反響が大きく、ついに刊行に至ったと語っている。
23. 「台本・楽譜集」の初版は2001年4月である。
24. 井上ひさし「決定版までの二十年」 p.193
25. 井上ひさし 同上書 p.194
26. 小森陽一「余白のある幕切れ」『すばる』2012.5 p.238
27. 井上ひさし『井上ひさし全芝居 その一』新潮社 1984.4
pp.275 - 276, p.282
28. 井上ひさし「意味より音を」「こまつ座&ホリプロ『十一
ぴきのネコ』公演プログラム」2012.1（「テアトル・エコー
『十一ぴきのネコ』公演プログラム」1973.7より転載）
29. 佐藤英和『絵本に魅せられて』こぐま社 2016.3 p.164
30. 坂本麻実子 前掲論文 p.100